

Laudato Si Circle (第1回)

2022年5月29日(日)

1, **開会の祈り**：フランシスコ教皇様が私たちに提案し、要請したお祈りから、始めようと思っています。ともに祈りましょう。

2, **ラウダート・シについて聞いたことがありますか？**「ラウダート・シ ともに暮らす家を大切に」は、2015年5月24日に承認され6月16日に発表された教皇様の回勅です。この回勅の題名、ラウダート・シは アシジの聖フランシスコの賛歌「Laudato Si mi signore(私の主よ、あなたはたたえられますように!)」から引用されています。アシジの聖フランシスコは、この美しい賛歌の言葉によって、私たちの共通の家である地球について次のようなことを思い起こさせます。「私たち皆が共に暮らし、生きていることを分かち合う姉妹のような存在であり、私たちをその懐に抱こうと腕を広げる美しい母のような存在である」。フランシスコ教皇様のラウダート・シの本にはこう書いてあります。「私の主よ、あなたはたたえられますように、私たちの姉妹である母なる大地のために。大地は、私たちを養い、治め、様々の実と色とりどりの草花を生み出します。」(LS) 聖フランシスコはすべての被造物の存在目的が創造主である神様を称えることとして考えました。

教皇様は人類を含めてすべての生き物の唯一の家である地球が直面している現在の状況をこのようにおっしゃいます。「この姉妹は、神から賜った善きものを私たち人間が無責任に使用したり、乱用したりすることによって、生じた傷のゆえに、いま、私たちに叫び声をあげています。」(LS 2)

この回勅は、キリスト者だけではなく、善意を持っているすべての人々、そして、全世界へのメッセージであり、つよい要請です。なぜなら、この回勅が扱っている内容は哲学的、神学的省察よりもっと具体的なことからです。それは共通の家である地球上で起こっている数々の変化と危機、絶滅している多くの種類の生物、ますます酷くなる貧富の差などに対して生命を気遣い、守るための緊急で急進的(Urgent and radical)な行動への参加を要請しています。

フランシスコ教皇様は、LS 137 で言っています。「あらゆるものは密接に関係しあっており、今日の諸問題は、地球規模の危機のあらゆる側面を考慮することのできる展望を求めています。それゆえここで、こうした危機の人的側面と社会的側面を明確に取り上げる総合的なエコロジー(integral ecology)の、様々な要素を考察していきましょう。」(LS 137)

なぜエコロジーでしょうか？ Ecology(生態学)と economics(経済学)に共通するものは何でしょうか？

結局のところ、英語の接頭語 eco-はギリシャ語 oikosに語原があります。Oikosは、家族、家族の所有するもの、家という3つのものが関連している言葉です。言い換えれば、生態学と経済学の両方が、家族、優れた家事管理、予算編成、および家族計画を扱います。地球が私たちの家であり、予算は自然の持つ資産の1つで、地球を共有するすべての生き物が私たちの家族です。つまり、エコロジーは地球の健全

さを維持する総合的な関係のくもの巣のようなものです。(integral web of relationships that sustains the well-being of the Earth)

今週の水曜日のニュースにありましたが、パンデミック以降、全世界で富と貧困の両極化現象がもっと酷くなっているようです。30時間ごとに1000億円を越える億万長者が1人ずつ生じて、逆に33時間ごとに100万人を越える人々が極貧層として転落しているという報告が出たそうです。ワクチン接種も先進国では4回目の接種が行われていますが、アフリカでは2回目の接種率が17%に留まっているようです。コロナパンデミックの中に、労働者たちは解雇され、給料が凍結された反面、億万長者たちは、この2年間の収入が彼らの今までの23年間分よりもっと増えたそうです。大型食糧企業カーギル(Cargill)は昨年創立以来最も多く50億ドルの純利益を上げたようです。富と貧困の両極化を扱ったこの報告書の名前は、「苦しみと痛みで得た利益」です。国際アムネスティの事務総長はこういう風に評価します。「世界は伝染病の対応に失敗し、もっと深い葛藤と不義の種を蒔きました。世界のあちこちで貧困が増えつつあります」ということです。

また私たちは今ウクライナで何が起きているか良く知っています。このような人間の活動によって起こされていることは、人間だけではなく、気候変動、生態的危機としてどれほどの生きものたちが苦しみ、絶滅しているのかを皆さんもよくご存じでしょう？これは、生命を豊かにする健全なエコロジーではなく、死に至る道に違いありません。私たちは現在、直面しているこんな状況の中で申命記の言葉「見よ、私は今日、命と幸い、死と災いをあなたの前に置く」(申命記30章15節)という言葉突き付けられているのではないのでしょうか？命と死の中でどちらを選びますか？

教皇さまは、LS 第4章 総合生態論(integral ecology)で環境、経済、社会の生態論、生態的回心を求めています。具体的な各部分はこれから一緒に分かち合いながら歩もうと思っています。私たちは、回心についてよく聞いてきました。ですが、みなさんは生態的回心には、慣れていないと思います。教皇様は、「進路を改めるべき物事がたくさんありますが、とりわけ変わる必要があるのは、私たち人間です」(LS 202)といいながら、生態的回心の必要性を強く求めています。「私たちを鼓舞する霊性なしに個人や共同体の行動を、刺激し、動機づけ、励まし、意味づける、内的原動力なしに、この高邁なことへの献身を、ただ教義(doctrine)だけで持続させることはできません」(LS 216)

したがって、わたしたちに必要なことは、生態的回心(ecological conversion)です。生態的回心を通して、私たちキリスト者は神様の継続している創造に積極的に共に参加し、「私が来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである」(Jn 10-10)というイエス様の御業に共に参加できます。キリスト教の霊性は、時代を通して成長してきました。現在私たちには求められているのは、人間中心の狭い意味の霊性ではなく、宇宙的な霊性です。私たちはこれからもっと詳しくこれについて一緒に分かち合いながら、歩んでいこうと思っています。

3, ラウダート・シ週間は何でしょうか？

この回勅が発表された直後に、その時まで環境問題に取り組んできたカトリックネットワークが「ラウダート・シ運動」を決定、発展してきました。ラウダート・シ運動は、この回勅が発表された5月24日前後1週間をラウダート・シ週間としております。この週間に、全世界の教会と信徒たちにラウダート・シのメッセージを深く認識し、お祈りし、様々な活動を通して、私たちの共通の家を守ることに参加できるよう求めています。教皇様の呼びかけに応じて、全世界の人口の約5分の1に当たるカトリック教会は、気候危機と生態危機の問題を解決する大きな力になります。

教皇フランシスコ様は、22日に始まったラウダート・シ週間を次のような言葉で始めました。「この週間を通して、いつもより一層注意深く、地球の叫びに耳を傾けましょう。これが共通の家を守るために、私たちが共に行動することを促すことになるようにしましょう。」

今年のラウダート・シ週間のテーマは、「ともに耳を傾け、ともに歩もう」とされています。「ともに」という呼びかけは、私たちが今シノドスの道程を共に歩んでいるからだと思います。このラウダート・シ週間は、2016、2020、2021年に続いて4番目のグローバルイベントになります。ですが、2020年と2021年はcovid-19パンデミックのせいで、個人的活動中心のイベントだったので、みんなが一緒に行うのは2016年に続いて、2番目になります。世界のあちこちで行われる数多くのイベントが、ラウダート・シのメッセージをすべてのキリスト者に伝えます。これによって、今の時代に緊急に求められる生態的回心に向かっていけるとと思います。ここにいる皆さんも、ラウダート・シのイベントに参加して、教皇様の呼びかけに応じていることを私はうれしく思っています。

4, 私たちが集まった意義：

- (1) この集まりで、私たちは、ラウダート・シ運動の一メンバーとなって、教皇様の呼びかけに応える一歩を踏み出しました。おめでとうございます。これから私たちは定期的に集まって、地球の声を聞き、貧しい人の声を聞き、そして、私たち、お互いの話を聞きながら、共に歩んでいきます。
- (2) 次回からは、回勅ラウダート・シを具体的に分かち合いながら、キリストの弟子として、人類と神様のすべての被造物が直面した課題を見て、識別しながら、歩んでいきます。
- (3) 私たちは、キリスト教の霊性の重要性と回心、特に生態的な回心が私たちをイエス様の教えに適う道に導いてくれることを分かち合います。そしてそれぞれの道で、生態的回心に向かって歩んでいきます。このため、さまざまなお祈りの仕方、特に被造物と共に被造物のためにお祈りすることを学んで、私たちの祈りをもっと深めて行きます。
- (4) この旅程が私たちにキリスト者としての召命を見つけるよう導いてくれるのを望んでいます。

(終)